
無刀の剣士と魔法少女

鑢七花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無刀の剣士と魔法少女

【Nコード】

N7189P

【作者名】

鑢七花

【あらすじ】

刀語とリリカルなクロスオーバー無刀の剣士の新たな物語始まります。

プロローグ

虚刀流当主 ヤスリヤツハ
鑢八葉

虚刀流当主として日々を送っていた彼は一人の少女と出会い少女と共に魔法という非日常と出会う…

少女と共に戦い彼は何を見るのか

無刀の剣士と魔法少女の始まりです

いきなり所変わってとある町のとある一角でのヒトコマ

？「ああゝ面倒だ」

こんな言葉を発して夜の町を歩いているは虚刀流当主として旅をしている鑢八葉（ヤスリヤツハ以下鑢）。

鑢「ここどこだゝ確か日本であることは間違いないんだが…」

地域単位を考えるならともかく国単位で考えてるのはどうだろう…

鑢「うるさいなあ黙ってる」

セリフ以外にツツコミをいれるなよ

鑢「じゃあ余計なこと言うなよ…ってこれじゃあ一人で喋ってる怪しいやつか？」

多分な、っていうかセリフ以外と語るのもやめるか

鑢「そうだな。」

?
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10

鑢「ん？なんか聞こえたか？」

しかしその場には何もない

鑪「あつちだな。はあ、また面倒なことになるかなあ？」

鑪「ああ面倒だ」

彼が向かう先にあるものとは？

今宵のお話はこれまでにございます。

主人公設定

虚刀流当主 鑢八葉

ステータス

身長 なのはより少し上

体重 同上

年齢 なのはと同じ9歳

容姿 鑢七花が小さくなった感じ

父である先代の当主と共に旅をしていたが八葉が8歳の時に他界。
その後は修業がてら旅を続けていた。

好きな虚刀流の技

六の構え「鬼灯」零の構え「無花果」「牡丹」「桜」「錦上添花」
「落花狼藉」「七花八裂（改）」

口癖

「面倒だ」「十全」（十分かGOODの意味で使う）「不全」（十全の逆の意味で使う）「あなたは強いけど相手より必ず強いと思うな」

身体能力は炎刀 銃の時の鑢七花とほぼ同じ（ほぼ理由は身体的な差のため）

無印での力関係

近接戦闘時

鎧>フェイト>アルフ>クロノ>ユーノ>なのは

遠距離戦闘時

なのは〃フェイト>クロノ>ユーノ>アルフ>鎧
ぐらいになる

剣士と少女の邂逅

八葉 s i d e

鑓「なんだこの状況？」

声の正体が知りたくて、声のする方に来てみればそこにあるのは動物病院そこまではいい。

だが動物病院には間違っても、もののけ姫のタタリ神みたいな生き物はいない（動物病院じゃなくてもいない）。

それに加えてイタチ？を抱えている女の子がいてタタリ神（飯）の前で尻餅をついていればなおさらだ。

鑓「大丈夫か？」

と女の子に声をかけてみた。

s i d e E N D

女の子 s i d e

私の名前は高町なのは（以下なのは）何処にでもいる小学三年生だったのにある日フェレットを拾ったの。

その夜……

？『だれか…助けて』

なのは「え？」

？『ボクの声が聞こえたら、応えてください』

なのは「何？何なの！？」

？『お願いします…助けてください！』

それ聞いた私が向かったのはフェレットさんを預けた動物病院。

何故かわからないけどそこから聞こえた気がしたの

動物病院に着いてみるとそこから……

ドゴォーン！！（↑擬音表現難しいな）

なのは「危ない！」

動物病院から飛び出してきたフェレットさんをキャッチした。

フェレット「来てくれたの？」

なのは「喋ったー！？」

？「■■■■■状況？」

なのは「ふえ？」

？「大丈夫か？」

声の聞こえた方を見てみるとそこには同じ年ぐらいの男の子がいた。

side END

八葉side

鑓「さて、君はだれか？とか何でこんな所に一人でいるか？とか聞きたいことはかなりあるけど…まずはアレから逃げよう。」

と言つて俺はタタリ神（仮）を指差した。

女の子「アレ？」

女の子は俺が指差した方を見た。

女の子「！！？何！何なのアレ！？」

鑓「俺が知るか。いいから逃げるぞ。」

女の子「う、うん」

俺は女の子連れてタタリ神（仮）から逃げた。

イタチ？「あなたには素質があります。」

鑓「イタチが喋った…だと」

女の子「イタチじゃないフェレットなの」

鑢「そうか…律儀な指摘をありがとう…でなんだって？」

フェレット「は、はい。ボクの声が聞こえた女の子の方には素質があります。」

フェレット「お願いしますボクに力を貸してください！」

鑢「ふうん。じゃあ方針は決まったな俺が時間稼ぎで戦うからその間に何をすべきかを、そいつに教える。アレもまだ追ってきてるみたいだから…」

フェレット「そんな！危険過ぎます！」

女の子「そうだよ！危ないよ！」

鑢「安心しろ。この程度の荒事は日常茶飯事だ！」

そう言っただ俺はタタリ神（仮）と相対した。

鑢「よう俺が相手になるぜ」

言っただやタタリ神（仮）は俺に飛び掛かってきた。

女の子・フェレット「危ない！！！」

鑢「虚刀流『牡丹』！！！」

俺はそれを後ろ回し蹴りで反撃した。

タタリ神（仮）は10メートルくらい飛んで蠢いていた。

二人？「す、すごい……」

二人？は啞然としていた。

鑓「言つたるこのぐらひは日常茶飯事だつて。というか早くそいつになにをすべきかを教えろ！」

女の子「そいつじゃない！私の名前はなのはなの！」

女の子は怒っていた。

鑓「それは悪かった……つと敵もそろそろ起きるみたいだな虚刀流六の構え『鬼灯』（ホウズキ）」

俺は左右の動きに特化した構えを取った……。

ついに鑓八葉の戦いが幕を開けました。無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまでにございます。

誕生！魔法少女

鑢八葉はタタリ神（仮）と向かい合っていた。

その頃なのは……

なのはside

なのは「フェレットさん！私は何をすればいいの？」

急いで戦っているあの子を助けなくちゃいけないの！

フェレット「はい！まずはこれ持つてください！」

そう言って首に付けていた宝石？を渡してきた

フェレット「ボクの後続けて言ってください。」

フェレット「我、使命を受けし者なり」

なのは「わ、我、使命を受けし者なり」

フェレット「契約の下、その力を解き放て」

なのは「契約の下、その力を解き放て」

フェレット「風は空に、星は天に」

なのは「風は空に、星は天に」

二人「そして不屈の心を……この胸に！」

二人「この手に魔法を！レイジングハート、セツトアップ！」

レイジングハート（以下レイハ）《スタンバイ、レディ、セツトアップ》

フェレット「す、すごい魔力だ……」

なのは「早く助けなきゃ！」

私はあの子の所に戻ったの……

side END

八葉side

なのは？がフェレットから何をすべきか教えてもらってる頃俺は…

『鬼灯』の足運びでタタリ神（仮）の攻撃を避けていた……

鑢「しっかし、なんなんだこいつは？普通なら『牡丹』一発で動けなくなるのに……生き物じゃねえのか？それとも俺の修業不足か？」

（答えは前者です。）

鑢「まあいい……ならこれで決めてやる……行くぞ！虚刀流最終奥義『七花八裂（改）』……！！！」

俺は七つの奥義を叩きこんだ。

タタリ神（仮）「

■■■■■

ヤツは声にならない音を上げて大人しくなった。

二人「大丈夫ですかー！」

今頃来たか…

鑢「今、大人しくしたから今の内にどうかしろ。」

二人「は、はい」

息ピッタリだな、おい…

フェレット「早く、封印を！」

なのは「ど、どうすればいいの？」

なのは？は取り乱していた。

フェレット「落ち着いて、心の中で唱えてください！そうすれば封印するための呪文が出てくるはずです！」

なのは「…………リリカルマジカル…忌まわしき封印されし器ジュエルシード封印…！」

レイハ《シーリングモード》

なのは「ジュエルシードシリアル21封印!!」

レイハ《シーリング》

なのは？がもっていた杖？から砲撃がでた。

フレット「封印…できた…」

タタリ神（仮）の中からひし形の宝石がでてきた。

フレット「レイジングハートでジュエルシードに触れください。」

なのはが杖を近づけると宝石はそこに入っていた。

鑢「これでまあ十全かなあ？」

フレット「（十全？）はい。これで終わりました。」

なのは「よ、よかったの〜」

なのはは安堵の息を吐いていた。

俺は辺りを見渡した。

鑢「……………おい、ここから離れたほうが良さそうだぞ。」

俺は冷や汗を出しながら言った。

二人「「ふえ（え）？」」

辺りは凄惨なことになっていた…

なのは「！？ご、ごめんなさ〜い」

なのはは俺の手を持って走り出した。

鑢「あゝ面倒だ〜」

俺は本気でそう思った。

鑢八葉と高町なのはのジュエルシードをめぐる初めての戦いは無事、幕を降ろしました。無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまでにございます。

戦いの後

「前回までのあらすじ」

魔法少女に手を引かれ俺は言った。

鑢「ああ、面倒だ」

以上終わり。

「そこ!？」とか言うなよ

八葉side

戦闘現場から逃げた俺たちは、公園に行き着いた。

鑢「なあそろそろ手を離してくれないか？」

俺の手は今だになのはに握られたままだ

なのは「ふえ？」

鑢「いや、だから手を離してくれないか？」

なのは「あーご、ごめんなさい／＼／＼／＼」

そう言って手を離した。

なんか顔を赤らめていたが……まあいいや面倒だ。

鑢「まあいい…ちょうどいいからそのベンチで一息つくぞ。」

なのは「う、うん／＼」

だからなぜ顔を赤らめる……

まあそんなこんなで俺たちはベンチに座った。

鑢「さて、ではまず自己紹介から初めよう。俺の名前は鑢八葉。君達は？」

なのは「私の名前は高町なのは小学三年生なの」

ユーノ「ボクの名前はユーノ・スクライアです。あの……さっきはありがとうございました。」

鑢「ではユーノ君一つ聞こう。アレはなんだったんだ？」

なのは「そうなの！アレは何？」

ユーノ「アレは……ジュエルシードが生み出した思念体です。」

なんか知らない単語が出てきたぞ。

鑢「ジュエルシードとは？」

ユーノ「はい…ジュエルシードはボクが発掘した願いを叶える力があるとされている物です。」

鑢「ふうん、何でそんな物があんなモノに？」

ユーノ「ジュエルシードには膨大なエネルギーがあります。ジュエルシードが暴走すると、さっきのように思念体になり暴れ回るようになるんです。」

なんだそりや……そう思っていると高町が口を開いた。

なのは「私からも聞きたいの……私が使った力のこと……それとレイジングハートのこと……」

ユーノ「あの力は魔法と呼ばれる力です。そして魔法は体の中にあるリコンコアと呼ばれる物から出る魔力を使って発動します。そして魔力を使うために必要なのがレイジングハート……デバイスなんです。」

なのは「えっと……つまり……？」

鑢「高町は魔法を使えるようになって、使うためにはそれ（レイハ）が必要だ。ということでもいいのかな？」

ユーノ「は、はい。だいたい合ってます」

なのは「なのは……」

鑢「……は？」

なのは「なのはって呼んでほしの／＼／」

顔を赤らめてそう言った（なぜ？）

鑢「わかったよ」

なのは「あ、ありがとうなの／＼」

また顔を赤らめた（だからなぜ？）（理由は後ほど！）

ユーノ「あの…ボクも質問があります…思念体を倒したあなたはいったい？」

鑢「……ああ、あれ？あれは虚刀流っていう剣を使わない剣術さ。」

なのは「剣を使わないのに剣術？」

鑢「文句言っな。それが虚刀流の定義なんだから。まあ4歳からやってきたからなあ………身体能力なら間違いなく人外だな。」

そう言うと二人は複雑そうな顔をした。

なのは「そう言えばユーノ君ケガは大丈夫なの？」

ユーノ「はい…お二人のおかげで残った魔力をケガの回復に当てれましたから…」

そう言うと体から器用に包帯を解いた。

なのは「わあゝ本当に治ってるのゝ」

高町は感心していた

なのは「高町じゃないなのはなの！」

鑪「心読まれたー!!」

何者!?

鑪「……まあいい、いい加減遅くなってきたしそろそろ帰ろうか……」

なのは「そうだね……」

俺たちは立ち上がろうとした。

なのは「イタッ」

鑪「どうした？」

なのは「あ、足が……」

鑪「ちよつと見せてみる。」

俺はなのはの足を診た。なのはの足は腫れていた。

鑪「あゝあ捻ったことに気づかずに走ったから腫れてるな。」

鑪「送るからさあなのはの家まで案内頼めるか？」

なのは「う、うん。」

鑪「さて……じゃあちよつとごめんな。」

俺はそう言っただけなのはおぼつた。

なのは「／／／／／／／／／／」

またまた顔を赤らめた（だから本当になぜ？）（だから理由は後ほど！）

鑓（ああ～面倒だ～）

口には出せないで心の中でそう言った……

side END

なのはside

思わず手を引っ張って来ちゃったけど……新ためて八葉を見ると力、カッコイイの／／／／／／／／

ふええええ、今絶対顔赤いよ／／／

八葉君さっきのは日常茶飯事って……今度OHANASHI
するの！

でも、今はもう少し甘えも……いいかな？

私は後ろから抱きついて体重を預けた……

side END

こうして二人は帰路につきました。次回は高町家とのお話です……
無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまでにございます。

高町家にて

〽前回までのあらすじ〽

O H A N A S H I フラグ立ちました〽

鑓「！？な、何か悪寒が……」

「だからそこ！？」とか言っなよ

八葉 s i d e

俺達はなのは案内の下、高町家こと『翠家』にたどり着いた。

コンコン

鑓「こんばんわ」

なのは「た、ただいま」

？「ど、どうしたなのは？それに君は？」

なのは「あっ……えっと……」

何うろたえているんだか…

鑓「私は鑓八葉と申します。お嬢さんが転んで、足を捻ってしまい
こうして送ってきたしだいです。」

俺は嘘の説明をした。

士郎「そうか…それはありがとう。私の名前は高町士郎その娘の父親だ。」

俺達の声聞き付けて奥から何人が出て来た。

？「アラアラ」

何にやけてる

？「なのは帰ってきたの？」

普通の反応だな

？「貴様！なのはになにをした！」

なんか小太刀もってきた（なんで！？）あつ士郎さんに捕まった。

士郎「落ち着け、彼は怪我したなのはを送ってくれたんだぞ。」

恭也「そ、そうか…いきなりすまなかった。俺の名前は高町恭也だ。」

桃子「私の名前は高町桃子よ」

美由紀「私の名前は高町美由紀だよ。よろしくね。」

鑢「ご丁寧にも…まあこいつ（なのは）をお願いできますか？」

俺はなのはを士郎さんに渡した…「こいつじゃないの〜」とか言うてたが無視しよう。

士郎「ほら、なのはちゃんとお礼を言いなさい。」

なのは「う、うん…ありがとうなの／＼／／」

顔を赤らめながら言った。

鑓「どういたしまして。」

そう言って俺は立ち去ろうとした。

なのは「あっ……………」

士郎「待ちたまえ。」

後ろから声が聞こえた……

八葉 s i d e E N D

士郎 s i d e

鑓「どういたしまして。」

彼が立ち去ろうとするとなのはが寂しそうな顔をした。

なのは「あっ……………」

士郎「待ちたまえ。」

私は声をかけた。

鑪「何ですか？」

彼は振り向いた。

士郎「いや、なのはを助けてくれたのはいいんだが…君は一人でこんな時間に何をしていたのかなと思ってね。それに…両親は？」

私が聞くと彼はにが虫を噛んだような顔をした……

士郎 s i d e E N D

八葉 s i d e

痛いところ聞いてくるな……

なんか下手にごまかすと追求してきそうだし…正直に言つか……

鑪「母は生まれてすぐ、父は一年前に死にました。今は一人旅をしています。」

俺が言うつと目を見開いて驚いていた。

士郎「じゃあ君は何処に行こうとしてたんだね？それに宿は？」

鑪「さあ？目的も目的地はありません。宿もないので野宿ですね。」

俺は軽く言った。

士郎「そうか……なあ鑓君どうだろう家に住まないか？」

鑓「は？……………」

思考停止……………思考再開

鑓「いやいや、初対面の相手になにを言ってるんですか！それにそんなこと一人で決めて「あらゝいいじゃない」」「いいと思うよ」「いいんじゃないか…ただなの「はいはい黙ってようねえ」」「美由紀…………」「いいと思うのゝ／＼／＼」「おい、そんな簡単なノリでいいのか！？」

心底驚いたぞ！そしてなのはなぜ顔を赤らめる！桃子さんがなかなかのはの顔見て「アラアラ」とか言ってるし！

士郎「さて、どうする？」

鑓「はあゝこちらとしては願ったりかなったりですが…なぜそこまで？」

士郎「なに簡単なことさ。ただ見過ごせないと思っただけさ。」

鑓「はあゝでは…お願いします。」

俺は頭を下げた。

五人「……………ようこそ！高町家へ！……………」

鑓「そういえば、なのは怪我は大丈夫か？」

なのは「あつ…まだちょっと痛いの／＼」

おいおい

士郎「そうだな…今日はもう風呂に入って寝るといい…安静にすればすぐに腫れも引くだろうから」

なのは「わかったの」

そう言っただけなのは奥に消えた。

鑓「さて、お世話になるからには私のことを話しておこうと思います。」

士郎「頼めるかな？」

俺たちは真剣な顔になった。

恭也「どうということだ父さん？」

士郎「いや、彼の雰囲気はまるで戦う者が纏う雰囲気だったのでね、軽く探りを入れたのだよ。そうしたら、それに気付いて逆に探ってきたのだよ。」

士郎さんはまいったという様な反応をした。

鑓「ですから関係なさそうな彼女には退場してもらったのです。」

士郎「では質問だ。君は一体何者なんだね？」

鑪「私は虚刀流当主、鑪八葉…一人の剣士にして一本の刀です。」

士郎「どういう意味かな？」

鑪「虚刀流とは剣を使わない剣術です。これが剣士という意味です。」

士郎「矛盾してないか？」

鑪「虚刀流は戦国からある剣法ですが、虚刀流の人間は代々こればつちも剣術に対する才能がありません。それどころか、振り上げれば後ろに飛び、振り下ろせば前に零れる…といった様に剣を使えないような呪いが掛かっているんです。」

鑪「ですから開祖は剣を使うことあきらめ、己の手刀、足刀を磨き、剣と対抗し超越する武術として創ったのが虚刀流です。」

士郎「なるほど……そんな剣法があつたのか……では“一本の刀”というのはい？」

鑪「その話をするためには先に四季崎記紀という刀鍛冶の話をしなければいけません。」

士郎「四季崎記紀？聞いたことないな……」

鑪「無理ありません。四季崎は、同じく戦国を生きた刀鍛冶で一切表舞台に立つことなく異端視された刀鍛冶ですから。四季崎が生涯で打った刀の数は千本。」

士郎「千本……少ないな。」

鑢「はい。ですが四季崎が異端視された理由は打った刀の異常さです。」

士郎「異常さ……」

鑢「はい。もう全て破壊され残っていませんが、話によると“絶対に折れない”刀や“寸分狂わず同じ物千本…その千本をもって一本”の刀といった刀があったそうです。そして四季崎が最後に創った十二本の刀は、異常さが際立ち“完成形変体刀”と呼ばれたそうです。」

士郎「…完成形…変体刀…」

もう全員、啞然としていた。

鑢「そして四季崎が“完成形変体刀”を創った後、それを凌駕する存在として開祖と共に創ったのが“完成形”ならぬ“完了形変体刀”“虚刀”『鑢』……虚刀流なのです。これが“一本の刀”の理由です。」

士郎「……………」

もう言葉も出ないようだ。

鑢「まあ…信じるか？否か？はお任せしますけど。これが鑢八葉という人間です。」

鑢「さて、私はこの様に得体の知れない人間です。別に「出ていけ」

と言われたら出ていきますがどうしますか？」

士郎「いや、それとこれとは話は別さ。君はなのはを助けてくれた。それだけで信賴には足るさ。」

鑢「お人よしですね。」

士郎「よく言われるよ。」

こうして俺は高町家に住むことになった……

side END

余談

士郎「そっいえば君何歳だね？」

鑢「…9歳ですが」

三人「「「^か本当（かね）！？」」「」」

桃子「まあ♪」

三人は心底驚き、一人いい笑顔でリアクションをとった。

鑢（なんだあの笑顔？ いやな予感がするぞ？）

予感の正体はいずれ明らかになります！

こうして鑢八葉は高町家に住むこととなりました…無刀の剣士と魔

法少女……今宵のお話はここまででございます。

八葉VS恭也そして始まるジュエルシード集め。

「前回までのあらすじ」

高町家（なのは以外）は俺の年齢を知った。

鑓「いやな予感がするぞ？」

予感の正体は後ほど！

「やつぱりそこ！？」とか言っなよ。

八葉side

朝、俺は起きた…。さて、昨日の事を整理しよう

俺は高町家に住むことになり、余っていたらしい部屋にあてがわれた。

至れり尽くせりだな…。おい

そういえばユーノ（フェレット）を飼う許可も出て、今はなのはの部屋にいる。余談だがユーノを見せたとき桃子さんと美由紀さんがおもちゃにしていたなあ。（ユーノ君は助けを求めたが八葉は面倒がつて無視した）

鑓「まあ起きるか。」

俺はベットから出てリビングに向かった。

鑓「あ、おはようございます。桃子さん。」

桃子「あら、おはよう八葉君。」

鑓「他の皆さんは？」

桃子「道場にいるわ……よかったら行ってみる？」

鑓「はい。」

俺は道場に行った。

カンカンカンカン……

道場では木刀がぶつかる音が響いていた。

士郎「おお八葉君来たか。」

鑓「おはようございます士郎さん。」

恭也「八葉、昨日お前は剣士だといったな……だったら俺と手合わせ
してみるか？」

美由紀「ち、ちょっと恭也……」

鑓「構いませんよ？」

俺は答えた。

恭也「じゃあこっちに来い。父さん審判を頼めるか？」

士郎「いいぞ。俺も虚刀流とやらを見てみたいからな。」

俺たちは道場の中心に行った。

士郎「それでは、いざ、尋常に…始め！」

恭也さんは二本の小太刀を構えた。対する俺は……

恭也「どうした？構えないのか？」

俺は両手を下げたままだ。

鑓「いや、俺は基本まずこれで相対します。」

恭也「虚刀流には構えがないのか？」

鑓「いや、これは虚刀流の中の異端児がやっていた“構えない”という構えです。」

恭也「ふざけているのか？」

鑓「これをやっていた…鑓七実という人が言ったそうです。「構える」だなんて無駄なこと。何かあるたび一々構えていてはその分だけ動作が遅れるじゃないですか…」と。そしてその人はこの構えにこう名付けたそうです。虚刀流零の構え『無花果』…と。だからふざけてるわけではないですよ。」

恭也「そうか……それはすまなかった…喋りすぎたな…そろそろいくぞ!」

鑓「こい!」

恭也さんは俺に向かってきて小太刀を連続で振ってきた。

鑓（ちっ!…思ったより早いな!）

俺は小太刀を避けれるものは避け、無理な時は手刀で弾いた。

手刀で弾いたときは一瞬驚いていたが、すぐに持ち直し小太刀を振ってきた。

鑓（恐らく、昨日の会話を思い出したか……）

手刀、足刀で剣に対抗するのなら弾くぐらいは想像できるだろう。

鑓（まあ…これで決めるか…）

俺は後ろに跳び、クラウチングスタートの体勢を取った。

鑓「虚刀流七の構え『杜若』」

恭也「それが構えか?」

鑓「気にしないでください。では行きますよ。」

位置についてよい……ドン!

恭也（！！速いな…だが！見切れない速さじゃない！）

恭也さんは一度両腕をクロスし左右にはらった。

恭也「もらった！」

本来ならな。だが……

ブンッ！

恭也「何！？」

小太刀は豪快に外れて両腕が開いた。

俺は懐に入り…

鑢「『鏡花水月』！！」

最速の攻撃を繰り出した。

士郎「そこまで！」

ピタッ

俺の手刀は当たる寸前で止まった。

恭也「なぜだ父さん！俺はまだやれるぞ！」

士郎「いや…今ので終わりだよ…虚刀流が剣と対抗する武術なら…」

鑢「はい。本来の『鏡花水月』なら、今の俺の手刀で恭也さん身体を貫いていましたよ。」

恭也「なっ!？」

士郎「そういうことだ。恭也…お前の負けだよ。」

恭也「そうか…俺もまだまだだな。」

鑢「いえ、あなたも十全に強いですよ。ですが…自分が強いからって相手より必ず強いと思わないことですね。」

恭也「なるほど…勉強になったよ。最後に教えてくれないか?最後の…『杜若』と言ったか?何をした?完璧に捉えたと思ったのに…」

美由紀「うんうん。私も気になった。まるですり抜けたみたいだったじゃない。何をしたの?」

鑢「その答えは…士郎さんわかりましたか?」

士郎「私も見切れたのは、最初の突撃だけだが…おそらく…単純な前後運動だろう。一度恭也と間合いを詰め、カウンターを放つときたところで急停止、急後退しはらいきったところで、また突撃…そんなところだろう…ただとてつもなく速い…しかも見切れなかったということは後退と再突撃はさらに速いのだろうな…」

鑢「十全。正解です。ただ付け加えれば間合いを測れなくするためには細かいのも何回か入れました。」

士郎「ほう…ちなみに何回だね？」

鑢「十五回です。」

俺は当たり前のように言った。

三人「…なっ（うそっ）！！」「」

三人は驚いていた。

士郎「すごいな……虚刀流とは……」

鑢「言っておきますけど、まだ全力ではないですよ。相手の武器を破壊するのを合わせて虚刀流ですから…『杜若』も全速力ではなかったですし…」

三人「…」「……」「」

三人は言葉が出ないようだ。

恭也「なぜ、全速力で来なかったんだ？」

鑢「簡単です。全力で行ったら不意は突けても、構えている以上防御される可能性があったからです。だから見切れそうなギリギリの速さでカウンターを誘ったんです。攻撃後は隙ができますから。」

恭也「なるほど……俺はまんまと嵌まったのか。ありがとぅい試合だったよ。」

鑢「どういたしまして。」

こうして俺たちは道場を後にした…

side END

士郎side

八葉君と恭也の試合を見たが…：恐ろしいな彼…いや虚刀流は、武器の破壊と言っていたが戦国からあるのなら真剣も破壊できるのだから…：素手で真剣を破壊するのは想像できないが恐らく…やるだろうな。あの年齢でこの実力…末恐ろしいよ…

side END

八葉side

俺たちは道場を後にし、朝食後なのはは学校に行った。（俺は9歳だが旅をしていたため学校には行っていない。）お店の方も休みらしく、俺はユーノとこれからのことについて話すことにした。

く八葉の部屋にてく

鑢「で？ユーノ、君はどうするんだ。」

ユーノ「待つてください。今、三人で念話で話せるようにしますのです。」

鑢「（念話？テレパシーみたいなもんか？いよいよ魔法じみてきたな…）わかったどうすればいい？」

ユーノ「はい、言いたいことを心の中で思ってください。」

二人「「こうか（な）？」」

鑢「なのはか？」

補足（八葉はデバイス等を持っていませんがユーノのサポートで念話をしています。）

なのは「八葉君？」

ユーノ「うまくいったみたいですね。」

鑢「じゃあ話すとするかこれからのこと……………」

結論だけ言つと俺となのはは、ジュエルシード集めを手伝うことになった。

ユーノは渋っていたが俺の「じゃあ一人でできるのか？」の言葉で折れた。

個人的な意見だが、なのはが手伝うのは大丈夫か？と思っている。
なのはは戦う上で大切なものがまだない気がするからな…………

その日の午後…………

ユーノ「！」

鑢「どうした？」

ユーノ「ジュエルシードです！」

鑢「わかるのか？」

ユーノ「はい！発動したジュエルシードは感知することができます
！」

鑢「なのはは？」

ユーノ「今、向かってます！ボク達も行きましょう！」

鑢「じゃあ肩に乗れ。案内頼むぞ。」

ユーノ「はい！」

こうして俺たちのジュエルシード集めは始まった……

s i d e E N D

さて、八葉が言った戦う上で大切なものは？…無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまでにございます。

戦う覚悟

「前回までのあらすじ」

俺たちのジュエルシード集めが始まった。

以上終わり。

「まともになった!?」とか言っなよ。

八葉side

俺は今ユーノの案内でジュエルシードがあるところに向かっている。

ユーノ「急いでください!なのはがもう戦い始めてます!」

鑢「はあ!? わかった。スピード 上げるからしっかり掴まってる!」

そしてたどり着いたのは神社……

二人「なのは!」

なのは「ユーノ君! 八葉君!」

なのははもうレイハを起動していた。

鑢「なんだありあ……」

そこには犬の姿をした化物がいた。

ユーノ「恐らく…原生生物を取り込んだんだと思います。」

二人「…どうということ（だ）（なの）？」

ユーノ「前より手強くなったということです！」

あの犬？が俺に向かってきた。

なのは「危ない！」

鑢「ちっ！」

俺は肩のユーノを掴んでなのはに投げた。

ユーノ「なっ！」

ドオーーン！

なのは「八葉君！」

鑢「……生きてるよ……」

俺は間一髪避けた。だが…

なのは「八葉君！腕が…」

左腕からは血が出ていた。

鑢「気にするな。掠っただけだ…早く終わらせるぞ！」

俺は左腕からでる血を右手で押さえてあの犬に向かっていった。

鑢「虚刀流三の奥義『百花繚乱』!!」

両手が使えないため俺は足技で蹴り上げた。

鑢「続けて…七の奥義『落花狼藉』!!」

俺は浮かび上がった犬を踵落として地面に叩きつけた。

ドオン!!

犬? 「……………ギャ……………ウ……………」

犬は動けなくなった。

鑢「早く…封印しろ…」

なのは「う、うん…」

なのはは封印に入った。

なのは「ジュエルシード封印!」

レイハ《シーリング》

鑢「…終わったか……………」

俺はその場に座り込んだ。

なのは「八葉君！」

ユーノ「八葉！」

二人は俺の方に寄ってきた。

二人「大丈夫なの（ですか）！」

鑢「平気だ。これくらい。」

ユーノ「すいません……ボクを庇って……」

鑢「気にすんなって言ったろ。……それよりなのは、ちょうどいいからお前に言っておきたいことがある。」

俺は真剣な顔で言った。

なのは「な、何？」

鑢「お前には戦う上で大切なものが欠けている……何だかわかるか？」

なのは「えっ……」

なのはは答えられなかった。

鑢「危機感だよ。」

なのは「危……機……感？」

鑢「そう危機感。俺は今回怪我をしたがこれは俺に限った話じゃない。お前もこうなる可能性は十全にあった。解るか？」

なのは「うん……」

鑢「もしお前が「俺が助けしてくれる」とか「きっと大丈夫」とか考えて戦っているのなら……今すぐ戦うことやめろ。その考えはいつかお前を殺す。」

ユーノ「ちょ、ちょっと八葉！それは言い過ぎ「だと思つか？」！」

俺はユーノを睨んだ。

鑢「だとしたらお前もそうだ。それにお前は俺たちが助けなければ、あの動物病院で死んでたぞ。それをわかって「言い過ぎ」なんて言ってるのか？」

ユーノ「……………」

ユーノは黙った。

鑢「なのは……引き際があるとしたらここだろう。君が足を踏み入れたのはそういう世界だと俺は思う。……どうする？決めるのは君だ。よく考えろ。ただ続けるのならそれなりの覚悟ってやつを見せろ。」

そういつて俺は立ち上がった……

side END

なのはside

危機感……私に欠けているって八葉君は言っただけ……それは……多分正しい……確かに戦っているとき私は「大丈夫」とか「助けに来てくれる」とかどこか他人事のように戦ってたの……私はどうすればいいのかな……

side END

ユノside

危機感……確かにボクはあの動物病院で死んでいたかもしれない……それになのはや八葉の力を見て「この二人なら大丈夫」って思ったのも事実だ……本来ならボクがやるべきことなのに……ボクの考えも甘かったのかな……

side END

八葉side

俺たちは家に帰った。

帰ったら「その腕はどうした!？」とか聞いてきたが俺は「折れて尖った木の枝に引っかけました」と嘘をついた。

怪我のおかげでなのはが落ち込んでいるのには気づかなかった。

その日の夜……

なのは「八葉君、今いいかな?」

なのはが俺の部屋に来た。

鑢「いいぞ」

なのははユーノと共に入ってきた。

鑢「二人共答えはでたか？」

ユーノ「はい。ボクは八葉の強さ、なのはの才能を見て、自分のことなのに二人の厚意に甘えてしまっていました。ボクの力は二人にはおよびません……だからボクは全力で二人のサポートをします！」

それがユーノの覚悟か……

なのは「私も……魔法が使えるようになって多分……浮かれてたのもこれから違う……ユーノ君に頼まれたからじゃなく自分の意思でジュエルシードを集めるの……！」

それがなのはの覚悟か……

鑢「まあ十全だな……じゃあこれからも三人で頑張ろうや。」

二人「うん（はい）……」

こうして俺たちはジュエルシード集めを続けることとなった。

鑢「じゃあ、もう遅いから寝ようか。」

なのは「あ………あの………八葉君？」

鑪「なんだ？」

なのは「い、一緒に寝てもいいかな？／＼／＼／」

鑪「……………は？」

思考停止……………

……………思考再開

鑪「いや、何を言ってるんですか！なのはさん！そんなの「ダメ？」
うっ！」

なのはは涙目で聞きいてきた。

鑪「（はあ）好きにしてください……」

なのは「ありがとうなの！／＼／」

顔赤くするなら言っなよ……

鑪（ああ～面倒だ～）

こうして俺となのはは一緒に寝ることになった……

side END

余談

後日一緒に寝たことがバレて士郎さんと恭也さんに真剣で（真剣！

？）追いかけまわされた。

俺が二人の真剣を『菊』や『桜』で破壊した後、士郎さんを桃子さん、恭也さんを美由紀さんとなのはが捕まえて、「○○○O H A N A S H I（しましよしよう）（なの）」「」と言って連れて行った……
…なんだろう合掌したくなった……

なのはとユーノにも戦う覚悟が出来たようです……無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまでにございます。

とがめ？

「前回までのあらすじ」

士郎さんと恭也さんが O H A N A S H I された。

鑪「お話？」

以上終わり。

「戻った！？」とかいうなよ

八葉 s i d e

鑪「初めまして、鑪八葉です。仲良くしてください。」

俺は今小学校にいる。

なぜ？と言われれば昨日の夜まで遡る……

「昨日の夕食にて」

桃子「八葉君、これを見てくれる？」

そついつて俺に冊子を渡してきた。

鑪「なんです？……私立の小学校？」

桃子「そうよ、明日からそこに行ってもらわよ」

鑓「……………は？」

あ、なんかデジャブ…

それに他の皆さんも固まっているし…

鑓「いや、いろいろ言いたいことはありますが、とりあえず何故？」

桃子「あら、子供が学校に行くのは当然よ。それに最低限の知識がないと将来こまるわよ？」

鑓「親父に旅の中で勉強は教えてもらいました。中卒ぐらいの学力はありますが？」

桃子「……………え？」

今度は桃子さんが固まった。

桃子「で、でも学校には行ってもらっわよ。義務教育があるんですから。」

鑓「ぐっ！」

そうきたか…

鑓「はあゝわかりました。行きますよ…でもなんでここなんですか？」

桃子「なのはも行ってるからよゝ一緒の方がいいかと思ってねゝ」

言質を取った桃子さんはいい笑顔になった。

鑢
(はあく面倒だ)

なのは「じゃあ一緒に学校行けるの？」

ようやく喋ったか…

桃子「行くだけじゃなく、同じ年だから一緒のクラスになるかもしれないわよ？」

なのは「ふええええええええええ！？」」

なのはは驚いていた。(どうに!?)

なのは「お、同い年だったの!？」

そこか……

鑢「そうだよ。言ってなかったか？」

なのは「聞いてないの」

鑢「それは悪かったな。まあ明日からよろしく。」

そうして翌日、冒頭に戻る。

女子「」「」「」わあ／＼／＼／

女子は顔を赤くしていた。（なぜ？）（八葉は七花と似た容姿で結構、顔はいいです。）

男子「…………（ギロツ！）」「」「」

男子からは睨まれた。（だからなぜ？）

なのは「八葉くーん！」

マジで同じクラスか……なんか嵌められた感があるな。

鑓「よお。」

俺は軽く答えた。

先生「高町さんの知り合いですか…では隣に座ってください。」

鑓「はい。」

俺は座った。

先生「では、一時間目は鑓君の自己紹介兼質問の時間にします。」

そういつて先生は教室を出ていった。

女子A「何処から来たの？」

鑓「しがない田舎から。」

女子B「誕生日は？」

鑓「七月八日。」

女子C「好きなタイプは？」

鑓「それは、ライクか？ラブか？」

女子C「両方で。」

鑓「ライクは面白いやつ。ラブは知らん。」

女子D「なのはさんとの関係は？」

ざわっ

ん？空気が変わったぞ？

鑓「ほぼ友達だ。」

女子D「ほぼって？」

鑓「気分だ。」

女子E「じゃあ彼女はいる？」

鑓「いません。」

……とこんな感じで質問責めにあつた。ほとんどが女子なのが気に入らなかつたがスルーした。

昼

なのは「八葉君。一緒にご飯食べよう。」

ざわっ

ん？また、空気が変わったぞ？

鑓「別にいいが…後ろの二人は？」

すずか「月村すずかです。」

アリサ「アリサ・バニングスよ。」

なんか対極な二人だな。

鑓「初めまして鑓八葉です…って名前はいいか…」

アリサ「ええ。それと私のことはアリサでいいわ。バニングスって呼びづらいでしょ。」

すずか「わ、私のことも、すずかって呼んでください。」

鑓「わかったよ。」

なのは「じゃあ四人でご飯食べよう。」

鑓「この四人？俺が入っていいのか？」

三人「「「いい（の）（よ）（わよ）」「」」」

鑓「じゃあお言葉に甘えて……」

俺は席を立とうとした。

男子「…………ふざけるな!」…………

鑓「は？」

男子A「この学校の三大美少女と昼食だと!羨ましいわ!」

男子B「おのれ鑓!許すまじ!」

男子C「皆!やつを討つぞー!」

男子「…………おおー!」…………

……何?このノリ?バカ○ス?

鑓「んな理不尽な……って聞いてないか……」

男子「…………うおおー!」…………

鑓「はあく面倒だ…………虚刀流『牡丹』『薔薇』『木蓮』『雛罌粟』『沈丁花』」

俺は虚刀流の技で適度に迎撃した。

男子達に100のダメージ男子達は倒れた。

鑓「さて、じゃあ食つか？」

俺は三人に聞いた。

三人「……」

啞然としていた。

鑓「しかたない……」

パンツ！

猫騙し！

なのは「にゃ！」

すずか「キャ！」

アリサ「わっ！」

鑓「起きたか？」

アリサ「ちょ、ちょっとアンタ！な、何今の！」

鑓「後で教えるよ……まあ食事をしよう。昼休みが終わる。」

アリサ「そ、そうね……」

こうして俺たちは昼食を取った。

アリサ「意味わかんないわよー！」

こうして一日が終わった。

余談だが男子の一件で俺の女子人気が上がったらしい。どうでもいいが…

その日の夜

なのは「ねえ、八葉君。アリサちゃんと仲良かったね。」

鑓「そう見たか？まあ、なんか波長が合ったのは事実だな。」

なのは「へえ、ソウナンド。」

あれ目の光が消えましたよ。

鑓「な、なのはさん？」

や、ヤバイなんかヤバイぞ…

なのは「アリサちゃんノコト、ドウオモッテルノ？」

うん。下手なこと言ったら危ないぞ…

鑓「気が合つぐらいですが？」

なのは「ホントウ？」

鑢「はい！」

なのは「ならいいの！」

目に光が戻った。

なのは「あ、あの今日も一緒に寝ていいかな？／＼／＼／＼／」

鑢「好きにしてください……」

なのは「うん！」

こうして本当に一日が終わった…

side END

今回は日常の一話でした。アリサさんの『ちえりお』は出るのでしょうか……無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまでにございます。

月村家にて

「前回までのあらすじ」

アリサの『ちえりお』はでるか!?

鑢「とがめー！ー!?!」

以上終わり。

「なんか違う!?!」とかいうなよ。

八葉side

俺たちは連日続くジュエルシードの疲れを取るため、士郎さんが監督をしているチームの試合を観戦している。ついでにアリサとすずかも一緒だ。

士郎「八葉君!」

ん?なんだ?

士郎「すまない八葉君…選手が怪我をしてね代わりに出てくれないか?」

鑢「は?ベンチはいないんですか?」

士郎「すまない…交代などで代わりがないんだ…頼むよ…」

アリス「いいじゃない。出なさいよ。」

すずか「出てあげた方がいいよ?」

なのは「見てみたいの」

四面楚歌か…

八葉「はあゝわかりましたよ。ユニフォーム借りれます?」

士郎「ああ。もちろんだ。こっちにきてくれるか。」

俺は試合に出た。

選手「頼んだぞ!」

俺にパスが来た。

八葉「頼まれた。」

俺は……振りかぶって……シュート!

パン!

一同「「「「「は?」「」「」「」

俺の蹴ったボールは……裂けて割れた。

八葉「……すみません……代えのボールありますか?……」

一同「「「「「……………」」」」」

こんなことがあったが最終的には勝った。

そして終了後選手の一人がジュエルシードを持っていることに、なのはが気づき譲って貰った。

そして一日が終わった。

次週休日

俺は、なのはと恭也さんと共にすずかの家のお茶会に誘われた。

今はバスの中だ。

八葉「なのはは、わかるが…恭也さんはなぜ？」

なのは「えっと…お兄ちゃんは、すずかちゃんのお姉さん…忍さん
って言うんだかど、忍さんと恋人同士なの。」

八葉「ふうん。」

ついでに言うとなのは俺の腕に抱き着いている。（なぜ…）

ほら、君の兄からの殺気がすごいよ……

そんなこんなで月村家

すずか「いらっしやい。」

俺たち「おじゃまします。」

恭也「忍は？」

？「奥にいらっしゃいます。」

メイド服の人が出てきた。

ノエル「申し遅れました。私はこの屋敷でメイドしています。ノエルと申します。」

俺に自己紹介をしてきた。

八葉「ご丁寧にどうも。私は鑓八葉、すずかさんのクラスメイトです。」

ノエル「存じ上げています。こちらへどうぞ。」

こうして俺たちは月村家に入っていた。

アリサ「遅かったわね。」

鑓「アリサか…」

アリサ「なによ。私がいたら悪いわけ？」

なのは「まあまあ、アリサちゃん。」

すずか「ははは…じゃあ始めよっか。」

こうしてお茶会は始まった。

鑓「しかし……あの二人はすごいな……あそこだけ世界が違っぞ。」

俺は恭也さんたちの方を見て言った。

三人「「「^{なの}本当（ね）（だよ）」」」」

なのは「そういえば……猫さん達は？」

鑓「え？猫がいるのか？」

アリサ「そうよ。しかもいっぱいね。でもアンタが来たときに、みんなどっか行っちゃったのよ。」

鑓「あゝあ、そりゃ俺のせいだな。」

すずか「どういうこと？」

鑓「いや、『動物よけ』ってスキルが俺にはあるんだよ。」

三人「「「『動物よけ』？」」」

鑓「動物には人格は通用しない。動物は圧倒的な力の前には、平伏すか逃げるだけ……あらゆる動物は俺の前から逃げだすんだよ。」

すずか「でも、ユーノ君は逃げださないよ？」

明記してないがユーノもいて、今はアリサのおもちゃになっている。

ユーノ「助けてよ！」

念話で助けを求めてきた。

鑢「あゝ、アリサ、そろそろ離してやれ。ユーノも苦しそうだ。」

そう言うとしぶしぶだが離してくれた。

ユーノ「ありがとう〜」

鑢「ユーノのことだけど、こいつは余程よく躡られてるのか、俺から逃げない。こいつの方が珍しいんだ。本来は逃げる。」

三人「〜〜へえ〜」

鑢「にしても『動物よけ』か……黒神を思い出すな〜」

三人「〜〜黒神？」「」

息ピツタリだな。

鑢「黒神めだか。同い年で昔、動物園に行ったとき会った同じく『動物よけ』を持っていた女の子だ。」

なのは「どんな人なの？」

鑢「俺なんかよりも圧倒的に格上のやつで、核に至っては比べる資格すら俺にはなくて、圧倒的な人格者で、^{ヒト}「自分は他人のために生まれてきた。」と豪語していて、^{アブノーマル}そいて最高の異常者だな。」

三人「「「アブノーマル?」「」」

鑪「異常だよ…黒神がサイコロを複数まとめて投げたことがあったんだが……どうなったと思う?」

アリサ「異常っていうなら…全部同じ目がでたとか?」

鑪「そういうやつもいた。ただ百万回やって百万回同じことやつてのけ、気持ちの悪い結果を残すのがアブノーマルだ。ただ黒神はそんな異常^モじゃない……黒神は恐ろしいことに縦に積み重ねやがった。」

三人「「「嘘!?!」「」」

流石に驚くか……

アリサ「何よそれ!ありえないわよ!」

鑪「その「ありえない」をやつてのけるのがアブノーマルだ。アブノーマルは理屈も才能も努力も確率も関係なく「何かをすれば必ずそうなる」存在なんだ。」

三人「「「……………」」」

鑪「理解できないか?安心しろ俺もできん。異常^{アレ}は理解しようとするだけ無駄だ。」

そういつて俺は紅茶を啜った。

その時……

ユーノ「！！ジュエルシードです！」

ユーノは走り出した。

なのは「ユーノ君！」

なのはも追っていった。

アリサ「ちょっと、なのは！」

すずか「なのはちゃん！」

鑢「俺が行くよ。二人は待ってる。すぐ戻る。」

アリサ「そうね……任せるわ。」

すずか「お願いします。」

俺も追っていった…

さて八葉が行った先にあるものとは……無刀の剣士と魔法少女……
今宵のお話はここまでにございます。

金髪の少女

前回までのあらすじ

黒神めだか登場！

八葉「してないよ！？」

異常終わり。

「字が違う！？」とか言うなよ。

八葉「なんだ……………あれは……………」

八葉は呟いた。そこには巨大な猫がいた。

八葉（なんだ？ゴジラ？ガメラ？猫だからネコラ？……………いや、何を言っている。かなり混乱してるな……………）

八葉「ユーノ！なのは！」

ユーノ「八葉！」

なのは「八葉君！」

八葉「なんだこれは！」

八葉は巨大猫を指しながら言った。

ユーノ「多分……猫の大きくなりたいてお願いが叶ったんだと思う……」

八葉「そうか……なあ、あれ倒していいか？」

なのは「ダメだよ！可哀相だよ！」

八葉「ですよ……じゃあ今回はなのはに任せる。」

なのは「う、うん……流石にすずかちゃんが困っちゃっから……」

八葉「そういう問題じゃない。」

八葉は小さな声で呟いた。

なのは「レイジングハート！お願い！」

レイハ《オーライ》

なのはは足から羽を出し空を飛んだ。

八葉「おいおい……飛ぶのかよ……！？」

八葉は後ろの気配（敵意）に気づいた。

なのは「ジュエルシード封！なのは！後ろだ！」え？

なのはの後ろから攻撃が来た。

レイハ《プロテクション》

なのは「キヤヤヤ！」

なのはは辛うじて防いだ。

なのは「な、なんなの！？」

八葉「あっちだ！」

八葉が指した方には金髪の少女がいた。

少女はなのはの目の前まで飛んで来た。

なのは「あ、あなたは？」

少女「ジュエルシードを渡してもらいます。」

少女は不意打ち気味になのはに攻撃し、なのはは撃墜された。

なのは「キヤアアアア！」

八葉「なのは！」

八葉は落ちて来たなのはを抱き止めた。

なのは「や、八葉君……」

八葉「ユーノ、なのはを任せる。」

ユーノ「ち、ちょっと待つ……」

ユーノは最後まで言えなかった。八葉が少女の方に走り出したから……

少女は巨大猫と向き合っていた。

そして……

少女「ごめんね。」

巨大猫に攻撃した。だがその攻撃は届かなかった

八葉「謝るならすんな」

猫の背に立った八葉によって止められたから

少女「！」

八葉（ていうかこの巨大猫、俺から逃げねえな。これもジュエルシードの力か？）

少女「あなたも邪魔をするんですか？」

八葉が猫のことを考えていたら少女が声をかけた

八葉「ん？さあ、どうだろ」

少女「さあつて……」

八葉「じゃあ、質問いいか？」

少女「……………」

八葉「だんまりか……質問一、なぜジュエルシードを狙う？」

少女「言えません」

八葉「言わなければ敵対するぞ。っと言ったら？」

少女「それでも……言えません」

八葉（言えないってことは、こいつとは別の意思が働いているってことか。大方……）

八葉「家族の頼みか？」

少女「!？」

八葉の言ったことが当たっていたのか少女は動揺した

八葉「はあくじゃあ最後の質問だ。お前は俺と殺し合いをしてくれるか？」

少女「え？」

少女には意味が分からなかった。だが自分の目的のために――

少女「邪魔をするならあなたを倒します」

と、答えた

八葉「不全」

八葉はその答えにつまらないという顔でそう呟いた。

八葉「いいよ。持っていきな」

少女「え？」

八葉「だから、持って行けと言っている。俺はあのこを連れて帰る」

八葉は猫の背から飛び降りた。飛び降りている途中

少女「ありがとうございます」

と、少女が呟いたのが聞こえた

八葉がなのはの元へ戻ると

ユーノ「八葉！何で止めなかったの！」

ユーノが苦言を訂した

八葉「うるさいな。回収してくれるなら別に良いだろ。それともお前がやるか？」

ユーノ「うつ」

そのとき少女がジュエルシードを持ってどこかに飛び去るのが見えた

八葉への気持ちに気づいたのは。なのははこの気持ちを伝えることが
できるのか。無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまで
にございます

戦う理由

「前回までのあらすじ」

なのはは告白するのか!?

八葉「誰に?」

以上終わり

「鈍感!?!」とかいうなよ

金髪の少女と戦った数日後、とある公園

なのは「にゃ」

なのはは妙な呻き声を出し、しりもちをついていた

八葉「はあゝ大丈夫か?」

八葉は薄っぺらい言葉をかける。

こうなった理由を少し遡ろう。本今朝

なのは「八葉君! 私強くなりたいの!」

相変わらず八葉と一緒に寝ていたなのはは、起きるなりそう宣言した。

八葉「とりあえず聞こう。なぜ？」

なのは「あの子、悲しい目をしてた。私あの子とちゃんと向き合って話がしたいの！」

八葉「そのために強くなりたいと？」

なのは「うん！」

強い意志のこもった目で八葉を見据えた。

八葉「十全。魔法のことはわからんが、それ以外のことなら強くしてやろう」

少し面白そうだなと八葉は思った

八葉「学校が終わったら公園に行くぞ。ユーノに結界張らして特訓だ」

なのは「うん！」

学校が終わってなのは達は公園に来た。

八葉「ユーノ、結界を張ってくれ」

ユーノ「わかった」

周りの風景がかわる

八葉「さて、特訓の前に前提条件を話そう」

なのは「前提条件？」

八葉「ああ。俺は空を飛べないから、金髪少女と戦うのはなのはで俺は援護できない。これはいいな？」

なのは「うん」

八葉「次、第三者の介入だ。俺達や金髪とも違う敵が来るか、金髪の味方が来るか分からんが、後者は俺とユーノで止める」

なのは「わかったの。違う敵が来たら？」

八葉「そのときは金髪と協力して倒せ。向こうから見ても敵なんだから交渉は出来るはずだ」

なのは「わかったの」

八葉「十全。では本格的に特訓しよう」

なのは「はい！」

八葉「良い返事だ。具体的には金髪に対抗するための特訓をしようと思う」

なのは「どうするの？」

八葉「あの金髪は、速さと近接戦闘が強い。まあ砲撃、魔法弾も多分なのはよりは強い。だからこっちが選ぶ戦略は、まず距離をとる

ことだ」

なのは「どうして？」

八葉「近接戦闘は経験がもの言う。経験を上回ろうと思ったら、性能で勝つしかないが、なのはにはその性能、力や速さでも負けている。だから近接戦闘はせずに距離をとる。あとは自分の攻撃を当てる練習と、速さで負けている以上相手の攻撃を防ぐ練習だ。いいな？」

なのは「わかったの」

八葉「では、訓練内容だ。俺と戦って一発俺に攻撃を当てるか百回俺が攻撃をするから五十回防御しろ。五十一回俺が攻撃を当てたら、なのはの負けだ」

なのは「そんな！危ないよ！」

八葉「安心しろ。普通にやったら絶対俺には当たらないから。俺も攻撃と言っても軽く触るだけだ。」

八葉はそう言う後ろに跳んだ

八葉「レイジングハートを起動しろ。先手はくれてやる」

なのは「うう、わかったの！どうなっても知らないよ！」

なのははレイジングハートを起動し、自身の周りに複数の魔法弾を出した。

なのは「いつくよー!」

その内の一つが八葉に向かって発射された

八葉「不全」

攻撃が当たる寸前、八葉の体がぶれた

なのは「ふえ!？」

八葉は左右に体を動かしながら、徐々になのはとの距離を詰めた

なのは「え? ええ!？」

なのはは完全に動揺し闇雲に魔法弾を放つ。だがどれも八葉がいたところを通り過ぎるだけだ。最初に出した魔法弾がなくなり、八葉となのはの距離がなくなつて……

八葉「打撃技混成接続縮小版」

八葉は五十一発の攻撃を一度になのはに放った。

なのは「はう!」

混乱して回避も防御もできずになのはは攻撃をすべて受けてしまつて、後ろにバランスを崩し、しりもちをついてしまった。

こうして冒頭に戻る

なのは「な、何が起きたの？」

八葉「俺が避けて、五十一発なのはに当てた。それだけ」

ユーノ「八葉……確かにそれだけなんだろうけど、あれは早すぎるよ。横から見てても一撃も見えなかったよ」

八葉「文句を言うな。本来は272回攻撃するんだ、それを51回まで減らしたんだ」

なのは「八葉君、強すぎるの」

八葉「ありがとよ」

なのは「八葉君はどうやって強くなったの？」

八葉「俺？ 俺は戦いの中で鍛えてきた。何度嫌気が差したことが」

なのは「じゃあ、なんで戦うの？」

八葉「死ぬため」

八葉は平然と言った

なのは「え？」

八葉「死ぬためだよ。虚刀流の人間は一人の剣士にして一本の刀、戦うことしかできない。そんな生き方はもう飽きたんだ。でも戦うことしか出来ないから、戦って俺という刀を圧し折ってくれる存在を探してる。俺を終わらせてくれる奴を探してる」

なのは「そ、そんなの——」

八葉「理解できないか？　されようとも思わない。それが俺が選んだ生き方だ」

なのは「そんなの間違ってるよ！」

八葉「だろうな。でも普通に生きることできない。戦うことでしか自分の生を理解できないし、真っ当に生きたら少しずつ自分が腐っていくを感じるんだ。なら俺は生きて死にたい。」

なのは「もうやめて！」

なのはは泣きながら言った

なのは「そんな悲しいこと言わないで！　死ぬため戦うなんてやめて！」

八葉「俺の人生だ。俺の自由だろ？」

なのは「八葉君だけの人生じゃない！　八葉君が死んだらそれで終わりじゃないんだよ！　私やユーノ君は悲しいし、苦しくなるんだよ！」

八葉「ずるい言い方だな」

なのは「ずるくたっていい！ だからそんなことやめて！」

二人の間に沈黙が流れた。やがて八葉が口を開いた

八葉「じゃあ、お前が使えよ。」

なのは「え？」

八葉「俺は生き方を変えるつもりはない。けど言ったら、俺は刀だからお前が所有して、俺を好きに使えば良い。それこそ生かすも殺すも自由にすれば良い」

なのは「じゃ、じゃあ「ただし」？」

八葉「俺を使うなら覚悟して使え。所有した時点で俺はどんな命令でも聞こう。生きろといえば生きるし、誰かを殺せと言われたら躊躇いなく殺す。その覚悟を持って俺を使えよ」

八葉は威圧するようになのはを見た。

なのは「……いいよ。私は八葉君を使う。そして最初で最後の命令をする」

八葉「その命令は？」

なのは「絶対に死なないで！」

覚悟を持った目で八葉を見返した

八葉「ふふふ、あーはっはっはっは——」

なのは「や、八葉君？」

八葉「十全だ。その覚悟と命令受け取った。俺は君が生きる限り死なない。そして俺は君の刀で君のために戦おう！」

なのは「うん！」

八葉「これからもよろしくな！」

なのは「よろしくなの！」

こうして八葉はなのはの刀として戦うことを誓いました。無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまでにございます。

温泉

「前回までのあらすじ」

八葉はなのはの刀になりました

八葉「十全かな？」

以上終わり

「普通!?!」とかいうなよ

俺達は今温泉にいる。

高町家の皆さんは、大型連休になるとお店を店員に任せて子のように遠出をするらしい

俺達とは俺と高町家と月村家とアリサだ。

温泉宿にて早速温泉に入ろうとすると

ユーノ「八葉!助けて!」

念話にてユーノに助けを求められていた。なぜかというと、アリサが女湯にユーノを連れて行こうとしたらだ。

八葉「ああ、アリサ、ペットの連れ込みはやめておけ。他の客にも宿側にも迷惑だ」

アリサ「ええ、……でもそうね。やめておくわ」

アリサはユーノを放した。

ユーノ「助かったよ！八葉！」

一悶着あつて風呂に入ろうとすると

ガシッ

なのはに腕をつかまれた

八葉「なぜ腕を掴むのかな？」

なのは「えつと……一緒に入ろうよ？」

八葉「なぜ疑問系？そして断る」

なのは「即答で断られたの！？ え、えつともうちよつと考えてくれても……」

八葉「は？ うーん……断固拒否する！」

なのは「考えても断られたの！？ しかも酷くなつたの！？」

八葉「そんなわけで、さらばだ」

俺は素早く↑（ここ重要）男湯に入った。桃子さんと忍さんの目が明らかにやばかったからだ。

温泉にて

士郎「君は髪を解くとそうなるのかい？」

俺の髪を見て士郎さんが聞いてきた。（アニメ版賊刀、鎧温泉シーンの七花参照）

八葉「ええ、旅をしてたの言いましたよね。切る機会もなかったですし、あの髪型も気に入ってるんで基本伸び放題です」

士郎「纏めるのが大変そうだな」

八葉「そうでもないですよ。基本後ろで括るだけなので。時間はかかりますが」

恭也「今は切ろうと思わないのか？」

恭也さんが会話に参加してきた

八葉「切っても良いんですけど……あんまり切ると調子が狂いそうです」

恭也「そういうものか？」

八葉「そういうものです」

後は他愛もない話が続いた

俺が風呂から上がって髪を纏め、ユーノを引き連れ、宿の廊下をあるいていたら――

？「ふんふん………君かな、ウチの子をアレしてくれちゃってのは」
オレンジの長髪で吊り気味の目をしたお姉さんになのはたちが絡まれている

なのは「え、あ、あの？」

？「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンちよに見えるんだけどねえ………」

なのはたちはオレンジ髪の威圧感で萎縮している

八葉（はあゝ面倒だ）

俺は普通にそう思った

八葉「その辺にしとけよ。お姉さん」

俺はなのはたちの前に出て、オレンジ髪と向き合った

なのは「や、八葉君？」

八葉「三人とも思ったより出るの早かったな」

アリサ「アンタが遅いのよ」

八葉「うるさい」

三人とも俺が出てきたら目に見えて緊張が和らいでいる

？「誰だい？アンタは？」

オレンジ髪は威圧感を増して聞いてきた

八葉「俺は鑢八葉。お姉さんの言うところのあの子にも伝えとけ」

まあこの程度の威圧は気にならんが

？「ふうん。まあいいや。ごめんねえ、人違いだったみたいだよ、知り合いに良く似てたからさ」。よしよし可愛いフレットだね」

俺の肩にいたユーの視線を動かし撫でる。

？「今のところは挨拶だけね」

な・ユ「！」「」

オレンジ髪が念話で話してきた。俺も聞こえているが気にするほどのことでもない

？「忠告しとくね。おいたが過ぎるとガブツといくよ？」

オレンジ髪は俺達の横を通り過ぎて行った

なのは「なんだったの？今の人」

なのはが念話で話してきた。

八葉「ユーノ、今伝わってるか？」

ユーノ「うん。大丈夫」

俺はユーノのサポートがないと念話できないので一回一回確認している

八葉「十中八九、金髪の仲間だろう」

なのは「何で？」

八葉「うちの子とか言ってたから」

な・ユ「「あ！」」

八葉「まあ、俺とユーノで対処するからなのはは金髪と戦え」

なのは「う、うん」

こうして若干の不安を残しつつも二人は再びあの少女と会うときを待っていました。それは意外と近いのかもしれませんが……無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまでにございます。

真剣勝負

「前回までのあらすじ」

敵の手先登場！

八葉「気にすることはない」

以上終わり

「それっぽい！？」「とかいうなよ

温泉旅館に俺達はある

ユ・な「「！！」「」

ユーノとなのはの様子が変わった

なのは「八葉君！ ジュエルシードなの！」

はいはいと

ところかわって旅館から外れた森の中

ジュエルシードは金髪の少女が既に封印していた。

オレンジ「あゝらあらあら……おいたが過ぎるとガブツとくよって言わなかったけ？」

旅館で絡んできたお姉さんが白々しく言う。

ユーノ「それをどうするつもりだ！ それは危険なものなんだ！」

ユーノが叫ぶ

金髪「話すつもりはありません」

なのは「でも…話し合いでなんとかならないのかな？」

金髪「私はジュエルシードを集めなくちゃいけない。そして貴女も同じ目的ならジュエルシードをかけて戦う敵同士ってことになる」

なのは「だから、簡単に決め付けない為に話し合いって必要なんだと思う！」

金髪「話し合うだけじゃ……言葉だけじゃ変わらない！ 伝わらない！」

そう言った瞬間、金髪が手に持ったデバイスでなのはに横薙ぎに攻撃した。

なのは靴から羽を生やし、空中に逃れた。ここまででは練習通りかな？

金髪「賭けて！ お互いのジュエルシードを一つずつ！」

なのは「このわからずや！」

空中で二人の戦闘が始まった

オレンジ「フェイト！ 今助け「させねえよ」！！」

金髪の名前はフェイトと言うのか。

俺はなのはの邪魔をさせない為にオレンジ髪に殴りかかった。

オレンジ「くっ！」

不意をついた攻撃だったがかわされた。

ユーノ「八葉！アイツは使い魔だ！」

八葉「使い魔？」

オレンジ「そうさ。アタシはあの子に作ってもらった魔法生命体。命と力、全てを使ってあの子を守るのさ」

八葉「十全ですね。でも、俺の相手をしてもらいますよお姉さん！」

俺は正面から突撃して拳を放った。オレンジ髪は俺の拳に自分の拳を打ちつけてきた。

オレンジ「ぐっ！」

打ち合いは俺が勝ち、オレンジ髪は距離をとった。

オレンジ「魔道師でもないガキのくせにどんだけ硬い拳をしてるんだい？」

オレンジ髪は手を振りながら言った

八葉「お姉さんもやりますね。名前は？」

アルフ「アタシかい？ アタシはアルフっていうよ。覚えときな」

八葉「アルフか。じゃあ行くぜアルフ。虚刀流七の構え『杜若』」

俺は突撃姿勢をとった

アルフ「なんだいそりゃ？」

相手は鼻で笑ってる

八葉「黙ってる。位置について…よい…ドン！」

最高速度で突っ込んで間合いを零にした。

アルフ「！？」

八葉「虚刀流五の奥義『飛花落よ——！！』」

両手の平手による鎧崩しを打ち込もうとしたら、空のなのはが首筋に刃を突きつけられているのが見えた。

ピタッ！

そのため俺は飛花落葉を寸止めた。

アルフ「な、なんのつもりだい？」

アルフの言葉を見無視して俺は後ろに跳んだ。

八葉「てめえのご主人様が向こうで勝ったからな。止めざるえなかっただけだ」

俺の言葉を聞いたアルフが空を見た。

アルフ「さっすが私のご主人様！」

八葉「そういうわけだ。勝負は預けるぞ」

アルフ「上等だよ。今度は油断しないよ」

八葉「ふん」

アルフはフェイトと合流しその場を去っていった。

落ち込んだ顔をしたなのはが空から降りてきた。

なのは「八葉君……私、負けちゃった」

ポンッ

俺はなのはの頭の上に手を置いた

なのは「ふえ？」

八葉「なのは、負けたからどうした？ それで終わりか？ 違うだろう。たとえ百回負けても俯いてんじゃねえ。自分の目的のために前を向け。それともお前の願いはその程度なのか？」

なのは「それは……違うの！」

八葉「なら一々落ち込むな。次自分が如何すべきか考えろ」

なのは「うん！」

八葉「それでよし！」

なのはの初めての真剣勝負での敗北でした……………無刀の剣士と魔法少女……………今宵のお話はここまでにございます。

三人目の魔導師

「前回までのあらすじ」

負けた

八葉「俺は違う」

以上終わり

「短!？」とかいうなよ

なのはの敗北から数日後

ジュエルシードの反応があり、俺達はフェイトと再び会えること期待してその場所に向かった。そこにはジュエルシードに取り込まれて化物となった樹があった。フェイトたちは交戦中だった

フェイト「バルディツシュ」

フェイトが攻撃を仕掛けるがバリアによって阻まれた

アルフ「生意気に、バリアまで張るのかい」

イマイチ決め手に困ってるようだ。俺はフェイトたちの間を抜けて……

八葉「五の奥義『飛花落葉』！」

表面を攻撃する鎧崩しの拳底で本体ではなく発生したバリアを攻撃した

ビキッ！

破壊こそ至らなかったがヒビが入った。

八葉「なのは！フェイト！今だ！」

なのは「デイベイン…バスター！」

フェイト「貫け轟雷！」

桃色と金色の砲撃がバリアを破壊しジュエルシールドが浮かび上がる

なのは「ジュエルシールド！」

フェイト「封印！」

息ピッタリじゃね？

ジュエルシールドの横で二人は向かい合う

なのは「私はフェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど……」

なのはは自分の願いを言う

フェイト「私には目的があります。立ち止まることはできません」

フェイトは確固たる意思を持った目でなのはを見据え、自身の武器を構える。

なのは「やつぱり、こうなっちゃうのかな？」

なのはも応える様に構える

フェイト「譲れないから……」

その言葉を最後に二人は一気に距離を詰める

クロノ「ストップだ！！　ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

二人の間を割るように無粋な邪魔が入った

クロノ「まずは二人とも武器を引くんだ」

クロノの言葉になのはとフェイトも地を降り立つ。

いきなり来て図々しいな

クロノ「このまま戦闘行為を続けるなら……」

八葉「どうする気だ？」

気配を殺して背後に立つ。

クロノ「何者だ！」

八葉「こっちの台詞だ！ 無粋にも勝手に乱入しておいて命令すんな！」

二人は「何時間に？」といった顔で俺を見ている。

ギヤーギヤー騒いでるクロノを無視してフェイトに視線を向ける

目が合って驚いたようだが、視線を上に向けると理解したようで一気に飛び上がり、撤退を……と思ったら撤退するついでにジュエルシードまで掴むつもりのようなのだ。

中々図々しい。まあ十全か？

クロノ「なっ！ させるか！」

クロノがフェイトに杖を向け攻撃する。

八葉「ちっ！」

クロノ「なっ！」

フェイトを庇って攻撃を受ける。

八葉「ぐっ！」

思ったより効いた。クロノは動揺している

フェイト「!!」

八葉「気にするな！ 早く行け！」

フェイト「は、はい！アルフ！」

アルフ「あいよ！すまないね！」

その隙に二人は飛び去っていった

クロノ「貴様！ なんで邪魔をした！」

八葉「邪魔？ ずれたことを言うな。いきなり攻撃した侵入者の分際でほざくな」

クロノ「時空管理局と言ったはずだ！ 公務執行妨害で逮捕する！」

八葉「そんなものは知らん。存在していても子供に攻撃をする奴がいるところなど信用ならんわ」

クロノ「あれは彼女がロストロギアを手に入れようと行動したから仕方なくだ！」

八葉「仕方なく？ それなら威嚇で十分だろ。でもさっきは当てる気だったろうが」

当てる気があるかどうかぐらいは気配で分かる

八葉「まあ、御託は良い。武器を捨てる意思はあるか侵入者さん？」

あえて挑発するように言う

クロノ「ふざけるな！ お前が捨てる！」

そう言っただけで武器を構える

八葉「やる気か？ 面白い」

クロノ「ステインガーレイ！」

複数の攻撃が一気に俺に襲い掛かる

八葉「遅い」

左右の足運びで避ける

クロノ「な！」

隙を見せた瞬間距離を詰め

八葉「四の奥義『柳緑花紅』！」

鎧通しの技。これならバリアジャケットとかは関係ない！

クロノ「ガハッ！」

クロノは吐血し、気を失った

八葉「はあ、面倒だあ」

なのは「や、八葉君？」

八葉「おお、なのは。これどうする？ 捨てる？」

なのは「捨てちゃダメだよ！？」

八葉「だよな。ユーノ、こいつのこと知ってる？」

ユーノ「う、うん。結構有名な執務官だよ」

八葉「あつそ。ということは管理局つてのも本物か。面倒だあ」

マジでこれ（クロノ）捨てたいな

？「少しよろしいですか？」

いきなり俺達の横に映像が現れた。映像に映っているのは若い女性。

八葉「誰？」

リンディ「私は時空管理局巡行艦アースラ艦長、リンディ・ハラオウン。その子の母親です。あの、息子は……」

八葉「生きてるよ。内臓に少しダメージを負ってるけどな」

本気で柳緑花紅を撃てば内臓を吹っ飛ばせるけどね

リンディ「そ、そうですか……」

とりあえず安堵している

八葉「それだけですか？　ならこれをつれて帰ってください」

リンディ「クロノがしたことは謝罪します。私たちとしては平和的な話し合いがしたいんですが……」

八葉「話し合いねえ。一樣聞くが、どこで？」

リンディ「こちら艦内で話したいんですが……」

ユーノ「八葉、ここは行つたほうが……」

八葉「黙つてろ、交渉中だ。このバカ（クロノ）のおかげでそちらに対する信頼はない。それでもそちらで話したいなら条件がある」

リンディ「なんでしょうか？」

八葉「条件一、必ず艦長であるアンタが出てくること。二、他の者の同席は認めない。三、武装はするな。以上だ」

リンディ「わかりました」

八葉「十全だが、反故した場合はこいつの首を刎ねるので覚悟するように」

リンディ「……は、はい」

八葉「では、赴こう。お前らはどうする？」

なのは「わ、私も行く」

ユーノ「ぼ、僕も」

八葉「わかった。艦長さんどうすればいい？」

リンディ「こちらで転移魔方陣を用意します」

八葉「はいはい」と

三人はアースラへ赴くこととなりました……無刀の剣士と魔法少女……今宵のお話はここまでにございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189p/>

無刀の剣士と魔法少女

2011年1月29日14時58分発行